

保育者養成の諸問題

立川 多恵子



はじめに（保育者とは）

庭先の木の芽がもえ、枯草の中に若みどりの草の芽がのび出した。大へん美しい。私はこのごろ、四季折々の草木の美しさを見入る。しばらく前までは、花の咲いた状態にのみ心奪われ、「花見に参りましょう」と人々に語りかけた。もちろん色彩のある花の美しさも格別である。しかし、新緑の美しさも、夏草のみどりも、秋の紅葉も、落葉の風情も、冬木立の寂しさにも、それぞれの美を感じる。「年のせいかな」と考えることもあるが、そういってしまいたくない。保育を考えているうちに、生あるものの美しさ、尊さを知ることができるようになったのかかもしれない。

等の時、植物に花が咲いたごとく、注目し賞賛を惜しまない。せい一杯生きている人間の、その時々のそれなりの美しさに気づかない。その美をいとおしむようにはぐくみ、次の美を育てていく、こんな仕事が保育につながるのではないかと考える。花の美しさだけを期待して、早く花を咲かせることのみ考えて、あせつてはいけない。子どもの無限の可能性（美）に向かって、瞬間、瞬間の子どもの姿を大切に受けとめて、適切な形で手をさしのべてあげる。これが保育者の仕事である。子どもの自然に発達する力を信頼しながら、あたたかい援助を与えたり、子どもと溶け合って、子どもと共に成長の喜びを味わうことができるのが保育者である。

「人間」を考える時、とかく、世間の人々はよい仕事をした、

一 保育者をいかに育てるか

名譽ある地位についた。よく勉強ができた、展覧会に入賞した、

序章では、私の考えている保育者像を書いてみた。これは保

育観につながるものである。

こうした保育観を実践する保育者をどう育てていったらよいのか、これが本論文の課題である。私の学校では、毎年二～三倍の応募者がある。その中から五十人前後の学生を入学させている。第一次試験は筆記であるが、第二次試験に面接を行なつてある。面接試験で不合格になることはまずない。しかし応募者の中には、「保育者にうつてつけ」と思われる者と、「保育者は無理ではないか」と考えられる者とがある。私の考える保育者は像に自然につながる応募者に出会うとうれしくなる。ここで問題になるのは、保育の適任者とはいかなる人間だろうか。なんらかの方法で、保育の適任者を選出することが可能ならば、方法を考えてみたらどうかということである。

現在のところ、短時間の面接面での把握なので、面接の勘にたることになるのだが、性格面からみると、たとえば、明朗であり、誠実であり、あたたかみのある人間ということになろう。これは応募者の生い立ちの中で育てられたものである。かりに保育の適任者を求めることが科学的に考えられるとしたら、適性検査を作り、実施してみるとことになるだろうが、保育の仕事の微妙さを考える時、自信がもてない。結局、保育者養成も人間教育の一環と考えて、応募した学生を一人でも多く

受け入れて、保育界で子どもと共に育つてもらいたいと願うことになる。

入学当初、適性ではないかも知れないと考えられる学生でも、その学生なりの味を生かしながら、二年後には、保育者として、子どもとの生活の中で、責任をもつてもらうことになる。こう考えていくと保育者養成校の任務は重い。

保育者養成の場合、大目に考えなければならないのは、人格の陶冶と、子ども観の確立と、それとともに保育觀の育成であると考える。一般に保育者養成を考える場合、保育技術の修得とか、職業觀の確立が上げられるが、保育技術の修得は、育成された保育觀を生かす方法として、子どもの気持を子どもの発達に即して、しっかりと受けとめてやつたり、また、保育者の気持を充分に子どもに伝えるための手段として、初めて必要になつてくるものと考える。

職業觀の確立については、学生が子ども観を獲得する過程において、また、保育觀をきずき上げていく過程において把握される職業意識がもつとも望ましいものと考えられる。

職業觀の確立ということだけをとり出して、学生に指導したのでは、子どもの幸せを保証する保育者を育成することにならない。

二 幼児観、保育観作りの実践例

近ごろの保育者養成の風潮として、かつての技術尊重から理論重視に変わったことは、保育は、まず子ども観の確立につながるものとして大へん喜ばしい。しかし、この考え方をもう一步進めてみると、子どもの生き生きとした姿の前に、その理論もうするのを痛感する。「子どもの中からの発見は大きい」私の担当している児童心理や、幼児教育の講義からとらえられる子どもは、ややもすると、概念的であり、単なる知識としてのみ定着する危険性がある。そこで本校では、理論のみを先に打ち出して、頭でっかちの形で、子どもを見るということを極力さけるため、一年の前期には「幼児教育調査」という科目を設けて、幼児の觀察を義務化している。

週一回、合計五回の觀察は、觀察幼稚園での保育を大切にしたいという気持ちから、前の三回を觀察のみにとどめて、あとの二回だけ子どものあそびの中に参加させている。觀察対象は、学生の興味を重んじ、指定していない。したがって、学生は幼稚園集団の中での子どもの生態をとらえて、自由な形で子どもを感じる機会をもつわけである。觀察を通して、子どもの表情や行動から、子どもの中に発見できた事柄を教室にもち帰り、学生一人一人が感じたものを大切にしながら、一回の觀察終了

ごとにグループ討議の機会を作っている。教師は各グループを巡回し、討議内容の幾つかを講義で取り上げ、次の觀察のための問題を提起したり、具体的な觀察例を理論に当てはめる。

学生は、第一回目の觀察では、性差やグループの大きさ等、子どもの姿を現象面でとらえることが多いが、第二回目の觀察になると、おとなとの価値観の相違に着眼することができるようになる。保育者志望の学生にとって、外側から子どもを觀察することは、忍耐のいる仕事である。

第二回目の觀察後の討議において、「子どもとあそびたい」とか、「子どもの中にはいって、子どもをもつと知りたい」とかいった要求が出始め、第三回目になると、この要求が、沸騰点に達する。本校のように最初から保育者になることを希望して入学した学生としては、当然の現象であり、大切にしたい感情である。子どものあそびの中にはいっての觀察の機会を得ると、觀察後の話し合いは盛り上がり、子どもとのかかわり方が問題として取り上げられる傾向が強くなる。

後期にはいると、あらかじめ教師の指示した対象児の追跡觀察を行なっている。これは觀察を依頼する幼稚園の保育にも、学生の觀察事項がプラスになっていくことをねらって、觀察幼稚園の保育者に対象を選出してもらっているためである。した

がって、学生は許された五回の観察期間を通して、毎週一回観察園に観察レポートを提出する義務をもつ。この仕事は相当努力を要することであるが、比較的順調に約束が果たされ、幼稚園の保育のために役立てもらっている。後期の観察は二人一組を原則としている。二人で共通の対象を見て、その子どもの行動の意味を多角的に考えてゆくには便利な方法である。二回に一度ぐらいの割にグループ討議の機会を設定し、グループの力で、それぞれの対象児の見方を深める。

五回の観察の終了後は、「私は対象児をこんなふうに理解している」というテーマでレポートにまとめられ、担任との話し合いの機会をもつ、話し合いを通して、学生たちは、担任と共に見方のできたことを喜んだり、見方の相違を経験し、子どもの行動に対する新たな見方を発見する。保育者の中には、今まで、気づかなかつた子どもの長所を取り上げて、卒直に喜んでくれる者もある。付属幼稚園をもたない養成機関の場合、協力幼稚園側の迷惑は一通りでないし、学校としても気がねは大きいが、学生の研究を通じて、保育者も保育研究の機会が得られる所としたらうれしい。

二年次になると、教育実習という名目で「子どもを理解し、子どもの発達を助けるために、保育者はどうあつたらよいかと

いう目的をもつて、週一回、十回にわたって、教育実習園で観察参加が実施される。学生たちは、毎日保育日誌に、感じたことを大切にした記録を書きつづける。学生のある日の実習日誌に次のようなことが記録されている。「今日はとても良い天気だ。五月晴れである。ほし組の教室へはいって行くとみーちゃんがすぐ私の所へとんで来て『先生いいこと教えてあげる。あのね、みーちゃん、今日、半袖シャツなの』と耳うちした。私は『そう半袖なの、それでみーちゃん寒くないの』といふと、『寒くないわ』とうれしそうに答えた。半袖になつたことが子どもにとつては、それほど大きなできごとなのだろうか」今まで寒い冬を過ごし、春になつた子どもの喜びを新鮮にとらえている。

また、子どもの受けとめ方について、実習の中で、新たな発見を記録したのが、次の文章である。「私にベッタリの子が何人かい。この子どもたちについて考えてみた。Aちゃんは、私の服を持つたりして、からだにベッタリついている。Bちゃんは直接からだに接触することは少ないが、『一緒にあそびたい』といつも要求てくる。同じような傾向のある子どもでも、よく見るいろいろだ。一括して考えてはいけない」一人一人の子どもの段階を大切にした言葉である。

またこの観察、参加の経験の中で、幼稚園における雑務を手伝いながら、雑務といわれるものの中に保育のあることを発見している。室内を整理しながら、「あー、あの子はこうだったのか」を思い浮かべることも楽しく、雑務が子どもと教師、教師と教師、教師と幼稚園を親しく結ぶ仕事であると理解するきっかけを作っている。

観察、参加の計画は、教室で学んだ理論を実践の中で、もう一度ほどいてみることになる。また実践の場での子どもの姿を教室へもち込んで、子どもの新鮮なさまを語り、教師も学生も共に、保育観をねり上げてゆく。

四月から週一回の観察、参加であるため、子どもの発達の流れのおよそを把握できる長所をもつているが、前日の子どもの動きを連続してとらえることができないという欠点もある。

『子どもたちの間の関係』はそのまま見ていることにしていて、書いている。なお、子どもの中で手さぐりをしている感じはまぬがれないが、保育者の姿勢の一つとして、大切なものをとらえている。集中実習の終わるころの実習日誌には、「近ごろ、子どもたちと親しくなってきたせいか、だんだん子どもたちに対して、いろいろなことを命令するような感じになってしまった。からだを動かすより、口を先に動かす傾向も見えてきた。恐ろしいことである」子どもと共に生活するむずかしさを素直に訴えた言葉である。

保育実習後の学生たちは、実践の経験を得て急に成長する。

実践がいかに思考を深めていくかをいまさらのように感じる。実習終了後は、共通に保育に関する小論等を読んで、まず各自で考え、クラス討議を通して、既成の理論をもう一度考え方、新しい方向づけを試みる。学生に子ども観や、保育観を書いてもらったことがあったが、よいものが少なくなかった。

どうも子どもを視覚や聴覚ばかりではなく、皮膚感覚でとらえて、からだの中に育ててゆくことを目的に保育者を養成している場合、抽象理論を求めるることは無意味だったのかもしれない。抽象的に子ども観や、保育観をみごとに書き流すことができるはいってゆくのも好ましいものではないと思うので、なるべく、学生が、保育者として、よく育つたとはいえないとも考えられ

る。充分意を現わせない文の中に、大切なものがひそんでいるように考える。それでも、学生の文章の中の大切な見方を二、三拾つてみる。「子どもは、まことに純粹である。清くて、無垢なものという解釈でなくて、『生きている』ことに全精力を使っている存在である。その子どもの中に、人間として『生きている』と感じることのできる保育者になりたい」とか、「とにかく、子どもを教えるのではなく、子どもと共にあそび、学んでいく状態、しかもおとなとしての自覚と責任をもち、子どもにとって、たよりになる人間になりたい」と書かれている。

不消化な文章も見られるが、肝心なものをつかんでいる。

おわりに（卒業生のために）

三月になると、免許状を手にしたたくさんの保育者が集立つ。わが国では四年制の大学で養成される保育者の数は少ない。現在のところ短大や養成所の二年制度の学校で養成される保育者の数が圧倒的に多い。もちろん四年間の養成期間があるにこしたことはない。しかし、二年制の養成機関において育つ保育者には別の味わいがある。二年間というのは短い期間である。したがって、二年制の学校で保育者を養成する場合には、何を大切にするかということを考えなければならない。私が大切にし

たいのは、子ども観と、それにともなう保育観の育成ということがある。保育技術も基礎になるようなものは押えておくにこしたことはない。

若い保育者にも、望ましい子ども観さえ充分に育つていれば、実践の場において、子どもの中にはいった時、一人一人の子どもに与えられる配慮が、たとえ未熟であつたとしても、子どもたちの成長への影響はプラスにこそなれ、マイナスではありえない。もちろん、試行錯誤が多いので、本人は大量のエネルギーを消費することが予想されるが、そのことが保育者としての成長につながることになるとしたら、それでよいのではないかと考える。しかし、ここで、心得ておかなければならぬことは、免許状を授与された段階で一人前の保育者になつたと考えてはならないことである。どの教育者の場合も同じことがいえるが、特に二年制の学校で養成された保育者の場合は、子どもたちの中にはいって、学校時代と形の異なつた研究が始まるのである。そこに、二年制の学校で育つた保育者の味が出てくるのである。研究といつても、もちろん、学者の研究ではない。保育者が実践の中で得た問題を中心に思考を深めてゆくことである。したがって、方法論のみに終始する研究でも意味がない。

若い保育者は、先輩に指導をあおぐ機会が多い。いろいろ相

談することが大切であると考える。問題は、先輩からしめされた方法をそのまま、うのみにすることにある。子どもは、一人として同じ子どもはないはずである。と同じように、同じ条件の場面はほとんどない。先輩の意見を充分にきいて、一度自分で消化して、あらためて、自分の保育の中に生かす努力が必要である。このことは、いろいろな研究会においてもいえる。

提示された具体的な保育の方法について、なぜこんな方法がとられたのか、その原理的なものをさぐり合うことが大切になろう。こうした地味な保育者の努力の中で、幼児教育は進展してゆくものと確信する。

昨年七月からつづいた保育者養成問題シリーズは今回で一応終わる。六人の筆者が、それぞれの立場でユニークな小論を書いた。しかし、底に流れるものは、すべて同じものである。「保育者養成とは、人間の魂の教育である」今回のシリーズ誕生の意味を大切にして、今後とも保育者養成に関する研究に地味な努力を重ねたい。

(埼玉県立教員養成所)

幼児の教育 第七十一巻 第三号

三月号 ◎ 定価二〇〇円

昭和四十七年二月二十五日印刷
昭和四十七年三月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼
発行者 津 守 真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一

印 刷 所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発行所 株式会社 フレー贝尔館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発行所フレーベル館にお願いいたします